

鶴田浩二の放れワザ —— かけもちもあざやか

フジ・テレビ 太田良康

フジ・テレビは本年¹三月、ニッポン放送、文化放送を母体に東宝、松竹、大映の映画三社の参加、協力のもとに開局した。中心スタッフは開局一年半前からNHK、KRT、NTV諸局の実習をうけ、万全の準備で出発したから他局の開局時のような混乱、珍談もなかった。また出演者自身がテレビ学に通じていて、その協力があったからでもある。鶴田浩二もその一人である。

東宝のスター、鶴田浩二がNTVに出演した時「よくもまあ、あれだけの売れっ子がテレビに出れるものだ」と感心したことがある。ところがフジ・テレビ開局と同時に、その鶴田が「鶴田浩二シリーズ」と銘打って長谷川伸の名作をやることになった。そのころはまだNTVと「鶴田浩二アワー」の契約が切れておらず、三月一ぱいはNTVとフジ・テレビ二局から放送することになった。さあそうなる忙しいのは鶴田自身だ。

撮影が終わってすぐ大阪から最終の飛行機でフジ・テレビへ飛び込むのが本番前日の月曜日の午後十時、そして午前一時までけいこ、それからNTVへ駆け足、午前四時まで深夜のけいこ、休むひまもなく、朝の十一時からフジ・テレビでカメラ・リハーサル、本番、とビデオ・テープに録音し終るのが夕方の五時、再びNTVへとってかえしてカメラ・リハーサル、八時半にはナマ放送、終わって羽田から大阪へとスーパーマンのような超人的な放れワザを続けた。しかもフジ・テレビでも、NTVでもただの一度もトチった事がないというから立派である。

芸に対する彼の熱意はおそろしくきびしいものでアプレ・タレントなど足もとにもおよばない。こんなに忙しくてもけいこの時にはすっかりセリフが入ってしまっている。担当ディレクター福中八郎は「鶴田さんの台本を見ると、たった今受取ったというようにキレイだが、それでいてセリフはすっかりおぼえている。若い出演者など台本がボロボロになるまでやっても間違える。全く不思議です」と首をかしげている。先日もなにかの手違いから台本を本番の前夜に渡すはめになった。しかし彼はイヤな顔一つせず、しかも十時間後の本番には一言一句間違わず芝居をしたのだから、スタッフ一同舌を巻いて驚いた。

このような大スターでいながらスターらしからぬ謙虚さ、そしてはげしい情熱を待った彼が、先月の末には「森の石松」と「伝八」の一人二役を、また、九月一ぱい彼自身の原案によるメロ・ドラマ「虹の狂詩曲」を放送するというのだから、鶴田浩二ファンはもちろん、テレビ・ファンも絶対に見のがせない番組の一つとなるだろう。

¹ 昭和34年